

2024.5.16



地域日本語支援ニュース こだま 第 443 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

---

■ともに生きる：ミャンマー、マレーシア そして東京へ■

ディム ディム リアンさんは、2017 年 9 月に、ご両親とともに第三国定住難民（注 1）として来日しました。都内にある RHQ 支援センター（注 2）で半年間の定住支援プログラムを受講後、UNHCR 難民高等教育プログラム（RHEP）（注 3）の奨学金を得て関西学院大学に進学し、現在は早稲田大学大学院アジア太平洋研究科で学んでいます。

8 歳で故国ミャンマーを離れたリアンさんが、その心の軌跡を書いてくださいました。

夢を語らず、先へ進む

ディム ディム リアン

こんにちは。

ディム ディム リアンと申します。ミャンマーで生まれ、マレーシアで育ちました。8 歳の時にミャンマーを離れ、ボートに乗って海とジャングルを抜けてマレーシアへたどり着きました。

ミャンマーでの幼少時代は、決して幸せなものではありませんでした。成績はクラスで最下位、貧しい家庭のため席は後ろの方でした。近視だった私は、先生が黒板を消したときに特に困り、友達のノートを書さなければならなかったこともありました。幸い、いじめられた経験はありませんでした。周り

の友達は皆優しく親切でした。しかし、近視の影響で、彼らの顔はいつもぼやけて見えました。雨季になると、洪水のために学校が休みになりました。その間、私は友達と折り紙で遊んだものです。一緒に船、飛行機、白鳥、箱などを作りました。もしかしたら、あの時が日本へ行くという前兆だったのかもしれないね。私に折り紙を教えてくれた人、あなたが誰なのかを覚えていません。でも、本当にありがとうございます。

マレーシアでの幼少期は、とても不安定でした。両親が仕事に行くときは、私は一日中家に一人でいました。あの頃はテレビで「バービー」を見ていましたが、英語が理解できませんでした。「バービー」の物語やセリフの意味がどうしても知りたくて、学校に行きたいと両親に伝えました。両親は一生懸命努力してくれて、UNHCR カードを使って幼稚園に入園することができました。しかし、2年間幼稚園に通った後、友達みんな小学校に進学しましたが、私はマレーシアの学校に通えないと言われました。マレーシアは、難民の地位に関する条約（1951 年）（注4）とその議定書（1967 年）に署名していません。そのため、条約上の難民の権利がマレーシアでは適用されないのです。マレーシアでは難民として働くことは違法であるため、母は二度逮捕されました。同様に、私はマレーシアの学校に行くことができませんでした。その後、私は Dignity for Children Foundation という、あらゆる背景、民族、国籍を持つすべての難民の子供たちのためのコミュニティスクールに通うようになり、熱心に教えてくれる先生方に出会いました。当時、その学校にはきちんとしたカリキュラムがなく、卒業しても中等教育を修了したことを証明することができませんでした。しかし、2014 年に International General Certificate of Secondary Education (IGCSE)（注5）が導入され、国際的に認められるようになりました。この IGCSE 証明書を持っていることで、私は日本で高校をやり直す必要がなく、大学で勉強を続けることができました。

2017 年、家族と共に飛行機で日本へ到着しました。新しい生活への不安と期待が入り混じり、心は高鳴っていました。しかし、そんな私たちを温かく迎えてくれた人々がたくさんいました。RHQ のサポートを受け、私は RHEP という奨学金プログラムを知りました。このプログラムのおかげで、長年の夢だった学位取得への道が開けたのです。関西学院大学での日々は、家から離れた生活ということもあり、家族の心配が尽きませんでした。しかし、そんな中でも、私は充実した時間を過ごすことができました。大学は交換留学生用の寮を用意してくれたため、世界中から集まった学生たちと交流し、かけがえのない経験を積むことができました。また、レストランでのアルバイト

経験も貴重な思い出です。マネージャーの勧めで、通常のレストラン業務以外、結婚式や忘年会、誕生日パーティーなどのイベントにも携わることができました。

現在、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科の2年生として、学びを深めています。授業の合間には、家庭教師のボランティア活動にも積極的に取り組んでいます。2024年からは、米国のNPO法人Hope For TomorrowのHope E-Learningプログラム（注6）に参加し、ミャンマーの学生400名を指導しています。一人でも多くの学生が目標を達成できるよう、教育への情熱を存分に活かして貢献したいと考えています。そして、日本に住んでいるミャンマーの中学生にオンラインで家庭教師をしています。

この文章を書きながら、ふと気づいたことがあります。早稲田大学を知ったのは、来日後のRHQのプログラムで出会った日本語の先生のおかげだったのです。大学で勉強できればいいのに、と心の中で思っていたあの頃。先生は、知らず知らずのうちに、こっそりと私にインスピレーションを与えてくれていたのです。何年も経って、私の口に出さなかった夢が実現したのです。将来の希望は秘密にしておきたいです。「夢を語ると風とともに消えてしまう」という幼い頃からよく聞いた言い伝えがあるからです。

（注1）第三国定住難民：難民キャンプ等で一時的な庇護を受けた難民を、当初庇護を受けた国から、新たに受け入れに合意した第三国へ移動させること。日本は、2010年から2014年まではタイの難民キャンプから、2015年からはマレーシアからの難民を受け入れている。

（注2）RHQ支援センター：公益財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部（Refugee Assistance Headquarters）が日本政府の委託を受けて実施する難民への定住支援プログラムを行っている都内の施設。

（注3）UNHCR難民高等教育プログラム（RHEP）：日本で難民認定されているか、もしくは難民に準ずる人達の中で、経済的理由等により大学進学が困難な人のために、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所) 駐日事務所および国連UNHCR協会とパートナーシップを結ぶ大学がそれぞれの奨学金制度により大学教育の機会を提供するプログラム。

（注4）難民の地位に関する条約：難民の保護を保障し、問題を解決するために1951年7月に開催された外交会議で採択された条約。1967年に採択された議定書と合わせて「難民条約」と呼ばれる。

（注5）IGCSE：イギリスの義務教育修了資格のGCSEの国際版。国際的に

中等教育修了を証明できる国際資格。

(注 6) Hope E-learning プログラム：<https://www.hopefortomorrowusa.org/>

---